

本番二週間前

④ Hey with ASSEMBLYと①②の二度目のセッションは、三月らしい陽気の中、行われる。その暖かさのせいではないだろうけど、集まりが芳しくない。今のところスタジオ入りしているのは先行カップルと新(?)カップルの四人のみ。

「こまつつあんは自主トレするって言っし、エド氏は追い込み時期だから遅れて来るのはしゃあないけど、頭の三人、A・S・Sはどうなってるん？」

「蒼葉ちゃんのケータイ、鳴らしてはいるんだけど・・・」

「SSのお二人は昨日こ出勤だった訳だし、きつとおつかれなんスよ」

業平は黙々とPCとPAの調整中。この際、この四人で音の基盤強化をしっかりと図るのが良かるつ、と踏んでいる。Kキボードb、Gギター、Vボイカルは基盤の上に乗せるといづのが彼なりのイメージ。バンマスは的確に指示を出す。

「じゃ、三人が来るまで『私達』と、えっと、breeze・・・」

「『Breeze with breeze』よ、@ちよ」

「行ってみよう!」

十四時過ぎスタートで、まずはこの二曲。重低音をとにかく固めていく。『私達』の方はオケだけはあるが、独特のうねりが強調され奏者は心地良さげ。弥生の持ち歌についてはその完成度が益々高まり、歌唱の方もバツチリ。あんまり想いを込めすぎて、誰彼さんを倒してしまっってはいけないが、歌の心と同じく、呼吸を整えつつ、程よく抑えつつなので大丈夫。息も合っていることなのでまず問題ないだろう。

三曲目、とりあえずリズムマシンでイントロを流しながら、ドラムとベースをどこから入れるかを試行していた矢先である。タイミングよく、A S Sの三人が入室してくる。

「あ、新曲?」

「何かいいかも・・・」

「すみません、でございました。あ、そのまま続けて」

登場順に一言ずつ。四人の気が散らないようにおとなしく入ってきたつもりだったが、何かマシンが不意にストップ。メンバーの視線は一斉に業平に向かう。

「なあんだのさん、イイ感じだったのにっ」

「いやいや、ちょっと閃くものがあったぜ」

バンマスが言っには、最初にマシンでリズムを打つ、その間、メンバー入場、配置に付いたらドラム、ベース、パーカッションと重ね、千歳のギター、櫻のキーボードが乗

る、生演奏主導になったところで、歌が入り、マシンは裏打ちに切り替え・・・

「って訳で、あんまり曲順考えてなかったんだけど、これならオープニングいけそつじゃん、て、今」

「八八、確かに入場してる感じした。遅れてきた甲斐あった、かな？」

「たく、櫻姉つたら、心配かけといてそりゃないんでねーの？」

「ゴメンゴメン。三人でね、積もる話などしながら、お昼とってたまではまだよかったんだけど、パンケーキの代わりの差し入れどうしよって、そこからちょっと・・・」

「ドーナツは相変わらずでとてもとでも。で、急遽」

蒼葉が差し出した箱を開けると、

「ワツフルだ、やったあ」

弥生は遅れた理由も何もなかった上機嫌、引っかかっているのは八広である。

「その、積もる話って何スか？」

「へへ、まあそれはまた追い追い、ね？」

千歳は姉妹を横目に見ながら一寸あわてる。櫻に取り繕ってもらいたいところだが、

「あら？ 千は急げじゃなかったの？」

おやつの中にはまだ早かったが、さっさとワツフルを口にして、話を封印してしまう千歳であった。

「で、ルフロン、タイトルは？」

「昨日、画伯の展覧会鑑賞して思いついた。もともと画から何かが聴こえたのが始まりだから」

その題とは即ち『聴こえる』。

「画家冥利に尽きますワ。でも、その感性、さすがは自称アーティスト」

「いや、ルフロンは魔女っ娘だから、聴覚も特殊なだけで・・・」

「フン、このバチあたりっ!」

本日のハクン、逃げ足速く、バチ!とは行かなかった。スタジオ内には笑い声が、聴こえる。

そのオープニング曲はひとまず後回し。頭の三人が揃ったので、それぞれのポータル曲を通してみるようになった。『届けたい・・・』『Down Stream』『Re-naturation』の三曲、順不同である。今となつては、もはやウォーミングアップ代わり。メドレーでないだりしない限り、どの順番で持ってきてもすんなり行けそうだ。

アンコールも含めて全十曲を演奏するとして、またあまり通し練習をしていないのは四曲。「食後で眠くならないように、難しいのからやるか」

演奏順未定ながら、ここで千歳のメッセージソングに取り掛かることになる。とりあえずは楽曲データ主体で、各自練習した範囲で生をかぶせる程度。作曲者だけは手本を示す必要もあり、しっかり歌とギターを乗っけている。とにかくこの曲に関しては演奏もさることながら、そのメッセージをメンバーで共有できるかどうかカギ。現場に居ずして臨場感をどれだけ高められるかもポイントになるだろう。言わば課題曲である。

特にパートを持たない蒼葉を除き、各奏者は段々青息状態になってきた。いくらタイトルがそうだからって、これじゃ正に、

「ま、『Waiting Blue』を地で行くと、こつなるってことだ」

「わ、笑えないんですけどお」

これではメッセージ以前の問題か。伝えようとする想いが強ければ強い程、空回りしてしまうこともある。これが何かの極意に通じる云々を千歳はいま一度かみしめてみる。

「ま、ここらでまたひと休み。舞恵の癒しソングでもどつ」

千歳編曲のボサノヴァ *visitors* が流れてくる。その淑やかで軽やかな調べに癒されながら、思い浮かべるは風、波、リセット後の情景……

ま「ご当地ソングって言うのと俗っぽくなっちゃうけど、これ一応千歳のテーマ曲」

さ「タイトルってまだだっけ？」

ま「千歳に名前があればね、そのまま曲名にしてもいっかなって思ってたんだけどさ。ねえハクン」

ハ「ingataで通用しちゃってたから、特に考えてなかったんよな。何かないでしょか？」

「ここからはBGMそっちのけで、毎度お決まりのディスクッション。千歳に冠する語句として「五カん」「蒼茫」といった説示的なものから、「いきいき」「再生」など主題的なものまで。オーソドックスなところでは「漂着」「受け容れ」、発起人とリーダーに敬意を表するなら、

さ「CSR千歳？ 何だかなあ」

や「咲くlove千歳だっ」

さ「弥生ちゃん、あのねえ……」

ワントンポ遅れて千歳がのたまつ。

「CSRと言えるかどうかかわからないけど、地元企業とかとタイアップして『ネーミングライツ』で名前付けるのも良さそうだね。あ、でもそれじゃ曲名が企業名になっちゃうか」

「当行で良ければ？ なーんてね。てゆーか、そういう話は石島トーチマンに確認しない

とダメなんでないの?」

「あくまで愛称でしょ? 自由でいいと思う。だからもつと、そう ingata 以外の選択肢もね。特に『ひ』を発音しなくて済むようにしてもいいかなって」

蒼葉のこの提案で方向性が変わる。第一声は、先刻から唸っていた人物が発する。

「千ちゃんが発見者だとすると、千千瀧。でも千と干て漢字で書くとそっくりだから、なあ……」

「@さん、何が言いたいのあ?」

「いつそ、『ちがた』ってのは? 先生もそれなら」

「不採用!」

当の千歳の意見も何もなく、弥生がバツサリ言い放つ。業平は頭を掻きながらも何だか嬉しそう。BGMはリブレイを続けている。

「何とかビーチ、って前にルフロン言っってなかったっけ?」

「まあね、歌詞の中にもそれは入ってる。でも　ビーチのままなんよ」
意外と決まらないものである。さつきは青息、今は溜息。と、そこへ……

遅れ馳せながら、冬木が駆け込んで来た。目に付くのは、おなじみのポケットの多いジャケット。弥生がピピと来たのは言っまでもない。

「弟も言っただけど、流れ着くものを収容する、つまり入れ物であること。それでそのカブした感じ、あと何となくカワイイとこ、『ポケットビーチ』なんていかが?」

「略して『ポケビ』? いいかも。さっすがご融資対象」

冬木はポケットに手を当てつつ、ポケーっとしている。曲名のヒントを提供した功、小さからず。こういう時は堂々と振る舞っていて構わないのだが、自覚がないんじゃないだろうか。い。

「はあ、この曲がウワサの。で、ポケビですか」

「曲名はいいとして、考えてたのは順番なんですよ。アンコールがかかったら、ラストにしつとりやるか、とも思ってたんだけど」

業平が引き続き唸っていたのは、全体進行の件でだった。この version のままだと、これと言ったアレンジは要らず、小編成でOK。だが、ラストは全員でバツと盛り上げて締めたいというのが本音。

「僕は最後の最後にBGMとして流してもいいと思うな」

「いやあ、せつかく詞があるんだし、歌の分担も決まってるんだから。やっぱり別 Teixe 作るかな。ねえ、弥生嬢」

「ん？」

かくして、タイトルの割には重厚でノリノリなのが新たに用意されることになる。

「譜面データを展開して」

「プログラムし直せばいいんだもんね」

月末に仕上げて楽曲データをダウンロードできるようにすれば手筈は整う。四月第一週に各自耳に入れておいてもらって、あとは前日のリハーサルで調整。ぶっつけ本番に近いが、こういうのも現場力のうちと考えれば、自ずと土気も高まる。

冬木がそろったところで、改めてオープニング曲の練習に入る。先の業平の提案通り、イントロ長めで、徐々に音が厚くなる入り方で試奏してみる。なかなかイイ感じではある。

「そつだなあ、いいんだけど、オープニングだからなあ」

何故か冬木がブツブツ。ステージ担当でもあるので、出だしのインパクト！というのが頭にあるらしい。

「一人多重コーラスで始めるってのはどう？ 隅田さんにやってもらって録音したのを流す」

「え、僕が？」

「かぶせるのはちょっとした仕掛けでできます。コーラスワークは多少心得あるんで、この『聴こえる』のサビから拾うってことで何とか。僕が口ずさむから、それに沿って何音節か入れてもらえば」

「そつか、カラオケ自由曲でもコーラス系でしたね」

「ポケットつながりと言えば『Pocket Music』の世界」

「ああ、達郎アカペラか」

いよいよ盛り沢山になってきた。スロー&緩やかに反しない範囲で、と行きたいところではあるが。

「さて、残るはワッフル、じゃないや『Smile U』だっけ？」

「それと櫻さんの感動作『晩夏に捧ぐ』」

共有できてはいるが、実際に演奏するのは今回初。ただし、曲順によっては、必ずしも全員が練習するには及ばない。

「う」ちよつとリスキーだけど、聴こえる、Mating、Down Stream それとま・・・」

さ「緩急をつけた組み立てになってればいいと思う」

ち「女性ボーカルを連続させると華やいだ感じにできると思っけど」

や「ならその最初はあたし！」

あ「エーッ？ 私よ」

八「後半から蒼葉さんが颯爽と出てくると、演出的にはいいかも」

ふ「アンコール前をどう盛り上げてくか、ってのはあるからね。それはアリ」

ま「舞恵は？」

じ「ずっと後ろじゃつまらない？」

ま「ま、自分なりに演出考えるじ」

順番と出入りについては、higataの引を続き議論するじとなった。今日のじは、『聴
くえる』、『Mating Blue』、『Down Stream』、『Breathe with breeze』、『Re-naturation』、『私
達』、『届けたい・・・』、『Smileful』をひび流して終わる。すむに大時近くになる。

「えっと、帰り際に恐縮ですが、その今回のステージイベントのチラシって、どうしまっ
よっ。」

「情報誌では軽く予告流しますけど」

「いえ、初音さんがね、お店に置きたいって言っんで」

「私、作るつか。楽器練習とかないんだし」

「じゃ画伯う、得意の静物画つきで、ネ」

「はいはい。じゃあムシュエディさん、その予告と合わせるんで、文面教えてください」
メンバーが片付けに入っている間、文面どうこうでやりとりが交わされる。が、ちょっと
怪しい？

「で、蒼葉さんにもご相談がありました」

「はあ」

かれこれ半年近く、言い出せずにいた話。

「五月号にぜひ。勿論、女性陣と一緒に」

「アハハ、そういうことでしたか。詳細はステージ終わってから、でもいいですよね」

また一つ、ちょっとした企画が動き出すことになる。五月はそう、青葉の季節である。

© monol ogger